

ダマヤンティーの愛¹

—bhakti の意味を尋ねて—

金沢 篤

はじめに

大学に入学して二年目、わたしは黒っぽいジャケットの一枚のLPレコード<浅川マキ MAKI II> (東芝 ETP 8117) を入手した。そのA面第5曲が「ゴビンダ」と題されていた。インド哲学なる学問分野があるということすら知らない頃のことである。もしかしたら、わたしが出逢った最初のサンスクリット語の文章が、この「ゴビンダ²」の歌詞だったかも知れない。歌うは黒い闇を

1 本攷は、平成29年5月17日が、2007年5月17日に亡くなった藤原伊織氏の没後満10年の命日に当たるとの自覚と共に着想されたと言える。そして、浅川マキという知る人ぞ知るの歌手の歌を日頃愛聴しているが、その初期の代表作の一つ「めくら花」が最初のLPレコードでは、「作詞・作曲：藤原利一／作曲：浅川マキ」とクレジットされていたのが、後に出たCDでは「作詞：藤原利一／作曲：浅川マキ」となっていることの「謎」を解明して、藤原氏を偲び、供養したいと考えたのがきっかけである。一人の人物が詩を書き、それに二人で曲をつけたということだろうと今でもわたしはそう理解しているが、確かその曲を収録したLPレコードが発売された時、藤原氏は、まだ東京大学の学部の学生である。そのあたりの事情を闡明すべく、調査などにかなりの時間を費やしたが、そちらはそれなりの成果が出せたとし、いずれ別途発表したく思っている。その成り行きから結果的に陽の目を見ることになった本攷は、駒澤大学大学会館246の3-2会議室において、平成28年5月14日(土)15時開催の平成28年度第1回インド論理学研究会で行った研究発表「Bhagavadgītā IX-26について」と平成29年7月29日(土)15時開催の平成29年度第1回インド論理学研究会で行った研究発表「古典インドの愛を哲学する」を踏まえて、今回なんとか書き下ろしたものである。研究会に参加いただいた方々、また貴重なご意見を寄せられた方々には心から感謝したい。藤原氏のこともあり、なんとしてもきっかけだけは明らかにしておかなければという必死の思いだった。ご迷惑をおかけし不愉快な思いをさせた方々にも、心より感謝したい。

2 浅川マキのこの「ゴビンダ」は、後で知ったのだが、ジョージ・ハリソン制作のレコードに収録された二曲 Govinda と Govinda Jai Jai を順番を入れ替えて合体させて出来ている。

背景にして佇む黒ずくめの長い黒髪の女性、浅川マキ。お目当てはB面の第1曲に収録されていた「めくら花」。その作詞・作曲が、大学入学後わたしが親しくさせてもらっていた先輩たちの一人、後に直木賞作家として華々しく活躍することになる藤原利一 (=藤原伊織) と知って迷わず購入したものだ。投げ込みの歌詞カードには、わけのわからない手書き文字をそのまま印刷した不完全なローマ字の歌詞らしきものが。それを眺めながら浅川マキの歌う「ゴビンダ」を聴いた。どういう意味だろう。歌詞の意味などどうでもいいと言うのだろうか。それから四半世紀も後に出た2枚組CD <浅川マキ DARKNESS I > (東芝EMI TOCT-9131~2) 附録のブックレットの歌詞も“GOVINDA ADI PURUSHAM TAMAHAMBHAJAMI/ VENUM KANVANTA MARAVINDA DALAYA TAKSHAM/ BARHAVATAM SAMASITAM BUDA SUNDARANGAM/ KANDAR PAKOTIKAMANIYAVISESHASOBHAM// ANGANI YASYA SAKALENDRIYA VRITTIMANTI/ PASYANTI PANTI KALAYANTI/ ANANDACHINMAYA SADUIJALA VIGRAHASYA”とあってほぼ同じだが、今度は活字印刷になっていた。DISC 1の目次には、第5曲の「めくら花」(作詞 藤原利一 / 作曲 浅川マキ) に続いて、第6曲「ゴビンダ」(作詞・作曲 不詳) とあったが、例のローマ字の歌詞の後には、「ジョージ・ハリソン プロデュース作品 インド音楽「ゴビンダ」より」との説明がついていた。

わたし自身もいつの頃よりか、それをインド音楽だとは理解していたが、そのジョージ・ハリソン プロデュース作品を遅ればせながら <THE RADHA KRṢṢNA TEMPLE LONDON> と題するCD (SAPCOR 18 EMI 7 81255 2) で入手してみて、初めて浅川マキの歌っているその「ゴビンダ」の歌詞の全貌をサンスクリット語で正しく知ることが出来た次第。浅川マキの「ゴビンダ」は、ジョージ・ハリソンのそのCD収録の第1曲 GOVINDA と第7曲 GOVINDA JAI JAI の二作品を順序を変えて合体させたものだった。しきりに反復して歌われる以下の部分は、歌詞カードを見なくとも何となく理解できた。「ラーダーとゴーヴィンダ」のゴーヴィンダ=クリシュナ (→ヴィシュヌ神) を讃えるクリシュナ (→ヴィシュヌ神) 信者の「讃」歌なのだと理解できた。不思議なご縁で、サンスクリットを教わることになったシヴァ教の専門家でもあられる原實先生のハラがシヴァ神³で、ハリはヴィシュヌ神だと、教科書の Gonda

3 2000年に刊行された原先生のご稀記念論集が、*Harānandalahari*と題され、Hans Bakker によるその巻頭論文の第1章が、“I Harāya Namaḥ”である点は、いわば感動ものである。

の初等文法書にも出ている。

したがって、浅川マキの「ゴビンダ」は、GOVINDA JAI JAI の以下のフレーズから始まる。

govinda jaya jaya gopāla jaya jaya

rādhāraṇāhari-govinda jaya jaya

牛飼いよ、万歳万歳 牛守よ、万歳万歳

[牛飼い女] ラーダーの愛するハリ、牛飼いよ 万歳万歳

反復を徹底的に重ねた後、「ゴビンダ」は、GOVINDA の次のフレーズに移っていく。

govindam ādipuruṣaṃ tam ahaṃ bhajāmi /

牛飼い、原初のプルシャ [クリシュナ]、かれを、わたしは、信愛する。

浅川マキは意味も知らずに歌っているのだろうか。うねりを異にした反復の多い歌詞。怪しげな合唱団を先導するようにして全盛時の浅川マキが歌う。本家本元に迫る素晴らしいパフォーマンスだ。ジョージ・ハリソン制作の CD のブックレットの英訳の冒頭は以下の通り。

I worship Govinda, the primeval Lord,...

わたしは、ゴーヴィンダを、かの原初の主を、崇拜する。

bhajāmi は「I.....worship」（わたしは、・・・崇拜する）だ。以下には、ブックレットのサンスクリットの歌詞を和訳してみた。

Govinda 「ゴーヴィンダ」

govindam ādipuruṣaṃ tam ahaṃ bhajāmi /

原初のプルシャ (ādi-puruṣa) たるゴーヴィンダ (govinda)、かれを (tam)、わたしは (aham)、信愛する (bhajāmi)。

veṇuṃ kaṇvantam⁴ aravinda-dalāyatākṣam /

barhāvataṃsaṃ asitaṃbuda-sundarāṅgam⁵ /

kandarpa-koṭi-kamanīya-viśeṣa-śobham /

govindam ādi-puruṣam tam ahaṃ bhajāmi /

フルートを奏し (veṇuṃ kvantam)、青蓮華 (aravinda) の花びら (dala) [の如き] 切れ長の目 (āyata-akṣa) で、孔雀の尾羽 (barha) の飾り (avatamsa) を帯び、青雲 (asita-ambu-da) [の如き] 美しい肢体 (sundara-aṅga) を持ち、一千万もの愛神 (kandarpa-koṭi) によって愛される (kamanīya) 美質 (viśeṣa) で輝ける (śobha)、原初のプルシャたるゴーヴィンダ、かれを、わたしは、信愛する (bhajāmi)。

aṅgāni yasya sakalendriya-vṛttimanti /

paśyanti pānti kalayanti ciraṃ jaganti /

ānanda-cinmaya-sad-ujjvala-vigrahasya /

govindam ādi-puruṣam tam ahaṃ bhajāmi /

歡喜 (ānanda) と精神 (cit) より成る實在 (有) (sat) で輝ける (ujjvala) 身体 (vigraha) を持ち、その全感官 (sakala-indriya) の機能を有する (vṛttimat) 諸肢体 (aṅga) は、諸世界 (jagat) を永久に (ciraṃ) 見て (paśyanti)、飲んで (pānti)、[そして] 思念する (kalayanti)、[そうした] 原初のプルシャたるゴーヴィンダ、かれを、わたしは、信愛する (bhajāmi)。

このサンスクリット文を決定する定動詞 “bhajāmi” は、bhaj- の現在能動態 1 人称単数と同定。「わたしは bhaj する」、信者である「わたしが」、[信奉する] 他者であるゴーヴィンダを bhaj する。この bhaj- という動詞から作られた名詞が問題の bhakti。わたしは、取りあえず「わたしは、・・・信愛する」と訳してみたけれど、実はこの bhaj- という動詞や、そこから派生した名詞 bhakti に遭遇した際、それらをどのように理解すべきかが今以てよくわからないのである。各種辞典を見てもどうにもならない、「愛する」「愛」と取りあえず置き換えて訳出することにしたら、まずはなんとかなりそうであるが、単なる人間同士の「愛」とは違いそうだから、「信仰上の愛」というニュアンスを訳語に籠めて、

4 Bhāgavata-purāṇa 10.15.42 に、“veṇuṃ kvanantam...” とあるのより、そう直して読んだ。

5 この複合語を “asita-ambu-da-sundara-aṅgam” と読む。

「信愛する」「信愛」としてみただけだ。「愛」を「信愛」に置き換えてみたとしても、その実質が明確になったわけではない。わたしたちが、日常的にも気軽に使う「愛」である。「愛」と一口に言ってもとにかく色々あるわけだから、このいわば「bhakti 愛」というものの他の「愛」との関係差異を少しでもはっきりさせたい。したがって、この bhaj-, bhakti の意味を具体的な用例に基づいて、改めてじっくり考察してみようというのが、本論攷の取りあえずの目的である。それらの語を含む古典の翻訳はそれこそ掃いて捨てるほどあるし、地道な文献学的な研究もかなりある。わたし自身にしてからが、これまでももう何度も同じ問題にチャレンジしてみているが、どうしても文章にして発表することが出来ないできた。それもこれも、この問題は、広範な時空に関わるものであり、多くの作品、多くの思想的な流れを考慮する必要があるのことであった。そうこうしてぐずぐずと時間だけを徒に消費してきたのであるが、ここらで思い切ってわたしなりの第一歩を踏み出さなければと腹を括った次第。古典インドを代表する『マハーバーラタ』の中のごく狭い範囲に限定してのはなはだ歯切れの悪い物言いである。サンスクリットの入門者として原實先生の授業で接して以来、今でも毎年のように繰り返し読んでいる「ナラ王物語」のヒロイン、ダマヤンティーの「愛」に限定しての形でならば、少しはなにか言えるかも知れないとの沙門しい考えに発したもの。テキストも、Lanman の『サンスクリット読本』A Sanskrit Reader で馴染みのもの（Bühler[1888] 所載テキスト）から、Caland のもの、Poona の Critical Edition 等とばらばらである。各種翻訳や研究も参考に出来たらと思うが、中心に据えるのは、『ナラ王物語』と『バガヴァッド・ギーター』の全和訳を公にしている上村勝彦氏と鎧淳氏のもの。また「古典インドの愛」を視野に入れての作業だから、原實先生の充実した一連の文献学的研究、オランダの碩学 Gonda の文献学的研究等の種々成果を参照するつもりである。

1. ダマヤンティーの愛：『ナラ王物語』に沿って

サンスクリットを学んだことのある人で、ダマヤンティーを知らない人はもぐりだろう。したがって『ナラ王物語』についても、ダマヤンティーについても説明の必要はないかと思う。ただちに具体的な用例に即して、ダマヤンティーに関わる「愛」の諸相の検討に入りたいが、その前に以下の若干の点についてだけは、しっかりと確認しておきたい。

つまり「A が B を bhaj する」との言明があるとする。このことは「A は B に対して bhakti を持つ」との言明を可能とするということである。そしてそれは同時に、「A は B に対する (B にとっての) bhakta である」ということだろうと思う。

わたしが最初に問題にしようと思うのは、以下の一節である。愛の種々相を司る様々な用語のうちの praṇaya、śraddhā、bhakti の三つが登場する。

(i) sā namaskṛtya devebhyaḥ prahasya nalam abravīt /
praṇayasva yathāśraddhaṃ rājan kiṃ karavāni te //1//
 ahaṃ ca[^]eva hi yac ca[^]anyan mama[^]asti vasu kiṃ cana /
 tat sarvaṃ tava viśrabdhaṃ kuru **praṇayam** īśvara //2//
 haṃsānāṃ vacanaṃ yat tu tan māṃ dahati pārthiva /
 tvat-kṛte hi mayā vīra rājānaḥ saṃnipātītāḥ //3//
 yadi tvam **bhajamānāṃ** māṃ pratyākhyāsyāmi mānada /
 viṣaṃ agniṃ jalaṃ rajjum āsthāsyē tava kāraṇāt //4//

(Bühler[1888], p.10,l.17-p.11,l.6) (=Mbh III-53-1~4⁶)

当然ながら、このテキストに対しても、既に色々な訳が与えている。

彼女は神々に対して敬礼すると、笑ってナラに言った。
 「王よ、もしお望みなら、好意をかけて下さい。あなたのために何をすればよいのですか。(一) 私とその他の私の持物は何でも、すべてあなたのものです。王様、信頼して好意をかけて下さい。(二) 王様、ハンサたちの言葉は私を燃やします。勇士よ、私はあなたのために諸王を集めたのです。(三) 誇りを与えてくれる方よ、もし愛している私を拒絶するなら、あなたのために、私は毒や火や水や縄で自殺します。(四) (上村 [2002] iii 145 頁)

姫は神々の好意に恭しく礼を述べた後、微笑みながら、ナラ王に申しました。
 「王様。お心おきなく御心のほどをお打ち明けなさいませ。あなた様のため、

6 本致で用いる Mbh(Mahābhārata) は、上村訳や Buitenen 訳が底本としているプーナで刊行された原典批判版である。

わたくしがなんぞお役に立てようことでもございましょうか。わたくしも、またわたくしの持ちますなにかの財宝も、誓って、皆あなたさまのものでございませう。ご主人様よ。ご遠慮なく、思いのままをお打ち明けくださいませ。あのハンサ鳥たちの言葉が、王様、わたくしを恋い焦がれさせました。それで、勇猛果敢なお方よ、あなた様会いたさに、わたくしが王たちを召し集めさせたのでございませう。貴き君よ。もしあなた様が、憎からず思し召されますわたくし⁷を袖になさいませうものなら、あなた様がもとで、わたくしは毒をあおり、あるいは火の中、水の中に身を投げ、あるいは縊死するやもしれませぬ。」（鑑 [1989] 26 頁）

かの [ダマヤンティー] は、神々に対して、敬礼を為した後、微笑んで、ナラ（王）に、語りました。

「お望みのままに (yathāśraddham)、[あなたは] [わたし(の愛)を] 享受すべし (pranayasva)。[わたしは] あなたに何をしたらよいのでしょうか？ わたし、及びわたしに属する他の財物、その一切は、あなたのものなのですから。王よ、ためらうことなく、[あなたは] [わたし(の愛)の] 享受 (pranaya) を為すべし。しかるに、ハンサ鳥たちの言葉、それが、わたしを焼くのです、王よ。あなたの為だけに、わたしによって、勇者よ、王たちが、召喚されたのです。もし、あなたが、[献身的に] 愛する (bhajamāna) わたしを、[享受することなく] 拒絶するのであれば、誉れを与える者よ、[その時には、わたしは] 毒に、火に、水に、ロープに訴えるでしょう (āsthāsyē)、あなた故に。(拙訳)

“Saluting the celestials, (Damayanti) smilingly said to Nala, “O king! love me with due respect and say what shall I do for you.

Myself and whatever riches that I have got are all yours. O lord, make love with full confidence.

O prince, the speeches of the swans are burning me out.

It is for you indeed, O lord I have caused the kings assemble here.

O the bestower of honor, if you forsake me who worship you, I must have recourse to either poison or fire, water or the rope for your sake.” (Dutt[2001],ii,p.160)

7 後でも触れる通り、これは明らかに誤訳である。

“She bowed to the Gods and said to Nala with a laugh, “Show your feelings in all good faith, king! What can I do for you? I myself and whatever possessions I own are all yours——show your feelings with confidence, my lord! The words that the wild geese spoke still consume me, king; it is because of you, hero, that I have assembled the kings. If you reject me, giver of honor, although I love you, I shall on your account seek mercy from poison, fire, water, or the rope!””(Buitenen[1975/1981], p.326)

ここに問題の bhaj- の現在分詞形 bhajamāna が登場する。ダマヤンティーを形容する言葉として。だが、この一節を和訳せよと言われても、pranayasva という定動詞と副詞の yathāśraddham をどう解釈すべきだろう。原先生は、pranaya についての論攷の中で、この用例の前 2 シュローカに関して、次のように英訳し、そしてコメントしている。

“Having bowed to the gods, she said to Nala with smile, « Show your feelings without reserve (*pranayasva*) as you like, king! What can I do for you? I myself and whatever possessions I own are all yours —— manifest your affection with confidence (*kuru pranayam*), my lord ».

Here both the hero and heroine are well-aware of mutual love through the medium of a *hamsa*, but Nala conceals his personal feelings, thinking solely of his duty as a messenger (*dūta*). Knowing this, the heroine requests him to reveal his personal love-feeling without reserve (*pranaya*).”(Hara[2002], p.163)

yathāśraddham という副詞を as you like と訳しているし、pranayasva という定動詞を、show your feelings と訳した Buitenen とは似ているものの、show your affection/manifest your affection と訳しているわけだから、一歩踏み込んだものとなっている。それは、原先生がその訳文の後に付した、コメントの中味と関係していると見なすことが出来る。原先生は、その時点で、ダマヤンティーとナラは相互に愛し合っていることに気づいていると理解している。ダマヤンティーは、ナラの自分に対する愛を確信しているということであり、ダマヤンティーのナラに対する不満は、それを言葉に表明しない点にあると理解しているのである。だが、果たしてそうだろうか。ダマヤンティーはナラに対してははっきりと愛を表明しているのに対して、ナラは一度もその愛をダマヤン

ティーに対して表明していないとわたしには思われる。原先生は、ハンサ鳥という仲介を通じて、二人は相互の愛を確信しているとしている。だが、それまでのハンサ鳥とのやりとりでは、ダマヤンティーは自分がナラを狂える程に愛しているとは自覚しているものの、ナラの気持ちを知ることはなかった。問題は、ダマヤンティーが自分はナラに愛されているという実感を持ってないという点ではないだろうか。したがって、ダマヤンティーによってナラに向けて発せられた命令法の *pranayasva* は、「本音を聞かせてくれ」でも「愛していると言ってくれ」でも構わないけれど、「自分が愛されている」という実感、「自分がナラと一つである」という実感を求めているのものであろう、ということである。もう 40 年以上も前のことであるが、原先生がその *pranayasva* に対して、確か「胸襟を開く」という言葉を口にされたたと記憶する。その時、わたしは当然ながらなるほどと感心したのだが、今なら、原先生の *show your affection* や *Buitenen* の *show your feelings* などよりも、インド人の *Dutt* が与えた率直な訳 *love me* とか *make love* というのが、むしろ事実在即していると言うべきなのではないだろうか。ダマヤンティーの求めているのは、「自分が愛されている」との実感、「自分がナラと一つである」との実感なのである。その意味では、日本語としてははっきりしない面はあるにしても、鑑訳の「お打ちあけください」よりも、上村訳の「好意をかけてください」を支持したくなる。そう考えてこそ、「わたしはあなたを<こんなにも> *bhaj* しているのに、そんなわたしを受け入れる／愛することをしないで、拒否するならば、わたしは死んでやる」といったダマヤンティーのその後のセリフが生きてくるというものである。

この用例 (i) ではダマヤンティーのそうした狂おしいまでの愛が、目的語を明記することのない *bhaj-* という動詞の現在分詞形で、さりげなく表明されているに過ぎない。ここまでナラとダマヤンティーの物語を必死に読み進めてきた読者にはわからない筈がない、ダマヤンティーを形容するその *bhjamāna* を、なぜか鑑氏は「憎からず思し召されます」と和訳しているのである。驚くべき誤訳という他ないが、それとも鑑氏はそれを *bhajyamāna* とでも誤読したのだろうか。後に鑑氏が自分の底本である *Caland* のテキストをデーヴァナーガリー化して語彙を付して刊行した鑑 [2003] を見てもその印象には変わりがない。語彙にはその *bhjamāna* を現在分詞として、「愛しと思う」(285 頁) とあるが、訳文は、「憎からず思し召されます」である。それはともかくとして、そのさりげない *bhjamāna* の使用に先立って、ダマヤンティー自身とダマヤン

ティーに属する他の財物の一切が、bhaj の向けられたナラに帰属することの表明が置かれている点には注目する必要がある。bhaj で表される「愛」は、すなわち「A が B を bhaj する」と表現される場合は、この場合の人間同士の愛のように、<なにかの授与>を前提としていることは間違いないところである。すなわち、A から B へのなにかの授与が伴っているということである。日本人のサンスクリット研究者には無敵であるように思われる『梵和大辞典』の bhaj の項目を見ると、まずは「分配する、分かち」という意味が登録されており、「(為、属)に配分する、・・・に割り当てる；(具)と分け合う；(業)に分け前を与える；授与する、贈与する(自)；(具)を賦与する；(自己の)分け前として獲得する、(業)を(業)として受取る、分け前を受ける、[(業)；<吠>はまた属；まれに他]を享受する；経験する、こうむる、体験する、得る、陥る・・・<後略>」(944 頁)とある。「わたしは、あなたを、bhaj 愛する」とは、「わたしが、あなたに対して、分け前を与える／授与する」ことを含意していると言える。したがって、その愛の成就とは、愛の相手である者が、授与されたものを受け取ることを前提としていると言える。だが、この bhaj- の場合、やっかいなことに、「有難う。いただきます。」と言って受け取るだけで済む問題ではない。また、授与しようという者がいても、受け手の側でそれを拒否する場合もあり得るのである。今のダマヤンティーの場合は、ナラが「わたし、及びわたしに属する他の財物」の受け取りを拒否するならば、ダマヤンティーは、「[わたしは、] 毒 viṣa に、火 agni に、水 jala に、ロープ rajju に訴えるでしょう āsthāsyē」と言う。つまり、「死んでやる」とまで言うのである。

にも拘わらず、原先生のコメントにある通り、ここではナラは立場上、ダマヤンティーに対して「愛する、享受する」とは言わないのである。事の黒白は、ダマヤンティーの自選式 svayamvara にまで持ち越されることになる。

(ii) niśāmya damayantyās tat karuṇaṃ paridevitaṃ /
niśāyaṃ paramaṃ tathyaṃ anurāgaṅ ca naiśadhe //21//
mano-viśuddhiṃ buddhiṅ ca **bhaktiṃ** rāgaṅ ca naiśadhe /
yathā-uktaṃ cakrire devāḥ sāmārthyaṃ liṅga-dhāraṇe //22//

(Mbh III-54-21 ~ 22) (Cf. Bühler[1888], p.16, ll.10-11⁸)

8 この用例(ii)の第2行から第3行にかけての bhakti を含む二行は Lanman の第5章までである「ナラ王物語」のテキストには出てこない。したがって、その元テキストたる

ダマヤンティーの悲しい嘆声を聞くと、また、彼女の最高の決意、ニシャダ国王に対する真実の愛、心の清らかさ、知性、献身、情念を知ると、神々は言われたように、全力を尽くしてその特徴を披露した。(二一—二二) (上村 [2002] iii 148 頁)

ダマヤンティー姫の、哀れを催す切々たる訴え—こよなく堅い決意、それにニシャダ国王への愛と、心の清らかさと思慮、ニシャダ国王への献身と情熱とを見知って、神々は、言われた通り、徴証（しるし）を身に帯びるのに全力を尽くしたのです。(鑑 [1989] 34 頁)

ダマヤンティーのその悲しい (karuṇa) 嘆き (paridevita)、最高の (parama) 決意 (niścaya)、そして、ニシャダ国王に対する真実の (tathya) 愛 (anurāga)、心の清浄 (mano-viśuddhi) と知性 (buddhi)、献身的な 愛 (bhakti) とニシャダ国王に対する愛 (rāga) を聞くと、神々は、言われたように、徴標を帯びること (liṅga-dhāraṇa) に、力 (sāmarthya) を行使しました (cakrīre)。(拙訳)

(iii) damayantīm tu kauravya vīrasena-suto nṛpaḥ //28//
 āśvāsayaḍ vara-ārohaṃ prahṛṣṭena^antarātmanā /
 yat tvam **bhajasī** kalyāṇi pumāmsaṃ deva-sannidhau //29//
 tasmān mām viddhi bhartāram evam te vacane ratam /
 yāvac ca me dhariṣyanti prāṇā dehe śuci-smite //30//
 tāvat tvayi bhaviṣyāmi satyam etad bravīmi te /
 damayantīm tathā vāgbhir abhinandya kṛta-añjaliḥ //31//
 tau parasparataḥ prītau dṛṣṭvā tv agni-purogamān /
 tān eva śaraṇaṃ devān jagmatur manasā tadā //32// (Bühler[1888], p.17, ll.4-12)

ヴィーラセーナ王の御子ナラ王とはいえば、一クル族の同朋（はらから）よ—浮き立つ心で、腰あでやかなダマヤンティー姫に優しく語りかけました。

「いとしい妻よ。そなたが、神々も居並ぶ中で人の子を選んできたお陰で、わたくしはそなたの夫となり、そなたの神々への誓いにこのように悦ぶ身の上

Bühler[1888] 所載の「ナラ王物語」（全）にも出てこない。

です。それゆえ、わたくしの身体に生命の続く限り、微笑み麗しい妻よ、そなたの傍におりましょう。そなたにこう誓いましょう。」

このように、言葉でダマヤンティー姫を優しく迎え入れ、恭しく合掌低頭しておりました。

互いに愛し合う二人は、そこで改めてアグニ神をはじめとする神々を拝して、かれら神々に心から帰依いたしました。(鑑 [1989] 35-36 頁)

一方、クル属の末裔よ、ヴィーラセーナの息子たる [ナラ] 王は、喜悅する内我を持って、優れた臀部を持てるダマヤンティーを、元気づけました。「愛おしきお方よ、あなたが、神々の面前で、男子 (pumāms) を、「献身的に」愛した／選んだ (bhajasi) のです。かくして、「あなたは」わたしを、あなたの言葉を悦べる (rata) 夫であると知りなさい。そして、わたしの生命が身体 (deha) のうちに存続する限り、輝ける微笑みを持てるお方よ、「わたしは」あなたの中にあるでしょう。この真実を [わたしは] あなたに告げるのです。」そのように、ダマヤンティーに対して、歡喜し、合掌して、言葉をもって。一方、相互に愛しく思う (parasparataḥ prītau)、その [ナラとダマヤンティーの] 両名は、アグニ神を初めとする、他ならぬそれら神々に、その時、心より、帰依しました。(拙訳)

この bhaj- の用例は、翻訳文にすると、「「献身的に」愛する」が、そのまま適用し得ないようだが、言いたいところは、神々の居並ぶ状況下で、ダマヤンティーが、人間の男であるナラに対して「わたしは、あなたを、「献身的に」愛する (bhajāmi)」「わたしには、あなたに対して、「献身的な」愛 (bhakti)がある」「わたしは、あなたの 「献身的な」愛人 (bhakta) である」と言い得る関係にあるということである。換言すれば、「わたし、わたしに属する他の財物の一切は、あなたのものである」と言い得る関係にあるということである。

ダマヤンティーにとって、待ちに待ったナラの自分に対する「愛の告白」の時である。(i) に見た、ダマヤンティーの熱い熱い愛の申し出に対して、それを悦んで受けるというナラの言葉が表現されている。「生命ある限り、わたしはあなたの中にあるだろう」という表現ほど、bhaj-、bhakti で表される「愛」の享受の本質を言い表すものはないと言えるのではないだろうか。

(iv) na me tvad anyā subhage priyāsty abravīḥ sadā /
 tām ṛtām kuru kalyāṇa purā-uktām bhāratīm nrpa //14//
 unmattām vilapantīm mām bhāryām iṣṭām nara-adhipa /
 ĩpsitām ĩpsito nātha kiṃ mām na pratibhāṣase //15// (Bühler[1888], p.37, ll.15-18)
 (=Mbh III-61-19b~21)

あの時あなたは、『可愛い人よ、あなたの他に愛しいひとはいない』と言った。すばらしい王よ、前に言った言葉を真実のものにして下さい。(二〇) 王様、夫よ、狂ったような、嘆いている私に、相思相愛の愛妻に、なぜ答えて下さらないの。(二一) (上村 [2002] iii 165-166 頁)

だって、いつもあなた様が、『そなた以外の女など、わたくしは、決して好きにならぬ』とおっしゃっていたんですもの。いとしい王様。あのときおっしゃったお言葉の通りになさって。いとしの妻が気も狂わんばかりで、悲嘆の声を上げておりますのに、国王様、ご主人様よ、お慕い申しあげるあなた様が、ご所望だったわたくしになぜお答えくださらないの。(鑑 [1989] 68 頁)

「わたしには、あなた以外の愛しき女 (priyā) が存する (asti) ことはない (na)」
 [と、] いつも [あなたは] 語っていました。愛らしい (kalyāṇa) 王よ、以前語られた、その、言葉 (bhāratī) を、真実 (ṛta) と為すべし。狂い (unmatta)、嘆き (vilapat)、認可された (iṣṭa)、妻 (bhāryā) たるわたしに、人民の王よ、求められた (ĩpsita) わたしに、主人よ、求められている (ĩpsita) [あなたが、] どうして答えないのでしょ。 (拙訳)

(v) yadi kaiścid aho-rātrair na drakṣyāmi nalaṃ nrpam /
 ātmānaṃ śreyasā yokṣye dehasya^asya vimocanāt //64//
 ko nu me jīvitena^arthas tam ṛte puruṣarṣabham /
 (Bühler[1888], p.42, ll.15-17) (=Mbh III-61-84~85a)

もし数日のうちにナラ王に会えないなら、この身体を捨てて、自己を至福と結びつけましょう。(八四) あの人中の雄牛なくして、私の生命が何になりましょう。(上村 [2002] iii 171 頁)

もしいくばくかの月日のうちに、ナラ王に見えることの叶いませんならば、この身を捨て、これに優る運命に身を委ねましょう。かの王なしで生きていて、わたくしに、一体なんの用がございましょう。(鑑 [1989] 78 頁)

もし、幾許かの昼夜のうちに、[わたしが、] ナラ王に見ることがない (na drakṣyāmi) ならば、[わたしは、] この身体 (deha) を解き放って、自己 (ātman) を、よりよきもの (śreyas) と結合させるでしょう (yokṣye)。牡牛の如き人間 (puruṣarṣabha) たるかれがいなければ (rte)、わたしの生命 (jīvita) があったとしても、果たして何の意味 (artha) がありましょうか。(拙訳)

If within a few days and nights I do not see king Nala, I will secure my own welfare by renouncing this body. What is the use of my life, separated as I have been, from that foremost of men ? (Dutt, ii, p.183)

既に二人の愛を確認し合ったナラとダマヤンティーであるが、運命のいたずらか、再び、二人の間の相思相愛に、(i) 以来の危機が訪れているのである。常に積極的なのは、ダマヤンティーの方である。反応の悪いナラに対してしびれを切らしているのは、またもダマヤンティーである。そして、そうした折に持ち出されるのは、性急なとも言い得る「自死」への道である。(i) にあっては、捧げられた自己の受け手、居場所の不安定性にたまりかねて、ダマヤンティーは、毒、火、水、ロープに訴えると、半ば脅しのような文言を吐き出したものである。今回は、そのように直接的ではないものの、やはり、「自死」をイメージせざるを得ない、やり場のない自己の受け手としての「よりよきもの」śreyas との結合である。この「よりよきもの」とは、この世と決別してあの世を目指すということだろうか。それとも、一度は袖にした人間とは比較にならない、はるかに優れた神々がイメージされているのであろうか。

II. ダマヤンティーの愛：『バガヴァッド・ギター』などの方向から

前節では、『ナラ王物語』から窺われるダマヤンティーのナラに対する「愛」を問題にした。そして、その愛は、ささやかながら、bhaj- という動詞の現在分詞形で表現されているのを見た。その実質をなす名詞の bhakti は、現れるのか現れないのか。他の「愛」との関係も明確にならないまま、通り過ぎるほかな

かった。また、同様に現れるのか現れないのかも定かではない定動詞“bhajasi”も、ダマヤンティーが「愛」を寄せる当の相手であるナラの口から発せられたものである。したがって、わたしは「ダマヤンティーの愛」とは大仰に言ったものの、その考究の堅固な資料としては、ただ、(i) の用例のみに基づいて想像をたくましくしただけであったようにも思われる。そこで、ダマヤンティーのナラに対する「愛」を的確に表現するのは、やはり、この bhaj- であり、名詞の bhakti である他ないと的前提に立って、本節では、「ナラ王物語」と並んでしばしば人の口の端に上る、同じ『マハーバーラタ』中の一エピソードたる「サーヴィトリー物語」の用例、また、bhaj- とか bhakti で表される「愛」のことなら、お任せ！といった、やはりあまりにも有名な『マハーバーラタ』中の一エピソードたる『バガヴァッド・ギター』中の若干の用例の側から、ダマヤンティーの愛 bhakti について少しく論究してみたい。ここでも、わたしにとっての最大の導き手は、原實先生の諸研究であり、また碩学 Gonda の論攷である。「サーヴィトリー物語」に関しては、以前 Brough 先生のテキストで読んで訳稿を作ったことがあるが、それを歌劇に仕立てた G・ホルストの「サーヴィトリー」については、かなり以前言及し、またつい先頃は、その曲名（タイトル）が、誰かのちょっとした無知と誤解から「サーヴィトリ」Sāvitrī と間違っって登録されてしまった事実を報告したばかりである。

次の用例を問題にすることから本節を始めることとする。

(vi) yathā yathā bhāṣasi dharmā-saṃhitāṃ mano[^]anukūlaṃ supadaṃ mahā-arthavat /
tathā tathā me tvayi **bhaktī**r uttamā varam vṛṇīṣva[^]apratimaṃ **yata-vrate** //50//

(Mbh III-281-50)

法（ダルマ）にかない、心地よく、意義深い優れた言葉を汝が語れば語るほど、汝に対する私の愛情は高まる。無比の願いごとを選べ。誓戒を堅く守る女よ。
(五〇)（上村 [2002] iv 365 頁）

「[あなたが、] 法に結びついた、心に叶った、大いなる意味を持つ、美しい言葉 (supada) を、語れば語るほど、あなたに対する、わたしの (me)、愛 (bhakti) は、昂進する (uttama)。決然たる誓願を持てる婦人 (yata-vratā) よ、[あなたは] 比類なき、贈り物を、選びなさい。」(拙訳)

As you constantly speak to me fine words compact with righteousness, agreeable to the mind, and of profound significance, so do I acquire a very deep respect for you. Choose a matchless boon, you who are ro your vows. (Brough[1951], p.51)

The more you address me in words pregnant with religious meaning, delightful to the mind, full of sweet phrases and of grave import, the more I am inclined to respect you. O lady, devotedly attached to your husband, crave an incomparable boon. (Dutt,ii,p.828)

ここには、問題の「愛」が、明確に *bhakti* という名詞形で現れてくる。だが、これは主人公のサーヴィトリの「愛」ではなしに、「ナラ王物語」にも登場した人間の死を司るヤマ神 Yama の人間の女サーヴィトリに対する「愛」として登場するのである。

わたしは行きがかり上、それを単なる「愛」としたが、例えば、北川・菱田 [1999] の中で、その「サーヴィトリ物語」の全訳を担当した菱田邦男氏は、「信愛 (*bhakti*)」(309 頁) と訳している。ダマヤンティーのナラに対する「愛」と、このヤマ神のサーヴィトリに対する「愛 (*bhakti*)」は、同じ手のものと考えてよいのだろうか。あるいは、「ナラ王物語」では描かれなかったナラのダマヤンティーに対する「愛」と、同じ手のものなのだろうか。それとも、それれとも全く異質の「愛」なのだろうか。

『バガヴァッド・ギーター』の中には、次のような貴重な用例が見られる。

(vii) *ye yathā mām prapadyante tāṃs tathā[^]eva bhajāmy aham /*
mama vartma[^]anuvartante manuṣyāḥ pārtha sarvaśaḥ // (BhG IV-11=Mbh VI-26-11)

人々がいかなる方法で私に帰依しても、私はそれに応じて彼らを愛する。人々はすべて私の道に従う。(一一) (上村 [1992] 51 頁)

この信仰の対象たる神が一人称で信者に対して「A が B を *bhaj* する」と表現している稀有な用例とも言い得る。これを例えば、わたし流に解釈するならば、「わたしは、その者を〔献身的に〕愛す (*bhajāmi*)」となり、「わたしには、

その者に対する「献身的な」愛（bhakti）がある」ということになる。この場合の bhakti が、先に見たヤマ神のサーヴィトリーに対する「愛」だろうか。『バガヴァッド・ギーター』の註釈者としても有名なシャンカラ Śaṅkara は次のように註釈している。

(viii) **ye yathā yena prakāreṇa yena prayojanena yat-phala-arthitayā mām prapadyante tāms tathā[^]eva tat-phala-dānena bhajāmy anuṅrṇāmy aham ity etat / teṣāṃ mokṣaṃ praty anarthitvāt** / (SBhG IV-11:p.64)

かれらは、或る「かれらなりの」方法（prakāra）で、或る「かつ、かれらなりの」目的（prayojana）をもって、なにがしかの果報（phala）を目指す者として、わたしに帰依する（prapadyante）のである、他ならぬそれに応じて、そのなにがしかの果報を与える（dāna）ことによって、わたしは、かれらを、bhajする（bhajāmi）、[すなわち] 愛する／慈しむ（anuṅrṇāmi）のである、というのがその「意味」である。かれらは、**解脱（mokṣa）を希求する者ではない**のだから。（拙訳）

bhaj- が、何の「授与」かはともかくとして、なにがしかの「授与」の主体 A の持つ性質（bhakti）に発した動作、A が B に対する状態を持つことを示す動詞であるという点では、基本的には同じと言い得るように思う。「サーヴィトリー物語」において、ヤマ神がサーヴィトリーに対して持つ bhakti も、この場合の bhaj- と同じであるが、サーヴィトリーが bhaj している相手は、夫サトヤヴァット Satyavat であって、ヤマ神ではない。また、ダマヤンティーが「ナラ王物語」で bhaj しているのは、あくまでもナラ王であって、ヤマ神などの神々に対してではないのである。図らずも (viii) のシャンカラによる註文が明らかにした、bhaj-/bhakti の意味を考える際には、それが、「解脱を求めてのものか否か」が問われることになるだろうということである。この場合、「解脱」とは、相手と合体すること、合一すること、一つになることである。「授与」「参与」「分与」というアクションが、絶対的な者との一体化（ekatva）を目指したものでどうかということである。

さて、『ナラ王物語』を超えて、その意味を探り出すと色々興味深い事実が

浮き彫りになってくるように思える。わたしが、bhakti を考える際にもっとも頼りとするテキストは、『バガヴァッド・ギーター』であることは言うまでもないが、まず何よりも以下の BhG IX-26 を見てみたい。一つの śloka の中に、問題の bhakti という名詞が二つ、pra-yam- という動詞の定動詞と過去受動分詞、おまけに、哲学の議論には欠かせない？ ātman が出てくるのであるが、誠に重要と思われるこの詩節に注目し、コメントを付した者は必ずしも多くない。

(ix) patraṃ puṣpaṃ phalaṃ toyaṃ yo me bhaktiā prayacchati /

tad ahaṃ bhakti-upahṛtaṃ aśnāmi prayata-ātmanaḥ //26// (BhG IX-26=Mbh VI-31-26)

人が^{バクティ}信愛をこめて私に葉、花、果実、水を供えるなら、その敬虔な人から、信愛をもって献げられたものを私は受ける。(二六)（上村 [1992] 83 頁）

上村勝彦氏は、上村 [1998] では、この訳文を掲げた後に、「信愛すなわちバクティをこめて、というところが重要です。このバクティとは、一つに結びつくという愛です。男女の愛もバクティです。「[席などを] 分かちあうこと」というような意味もあり、「参与すること」という意味もあります。男女の愛の場合なら、かなり具体的な愛です。全身全霊で「私」すなわち最高神たるクリシュナを愛し、祈念して、葉や花や果実や水を供えるなら、クリシュナは必ずそれを受けるといいます。」（上村 [1998] 193-194 頁）と説明している。単なる訳文からは窺われない、訳者上村勝彦氏の、その心中にある決然とした理解が知れて興味深い。

だが、上村氏のこの説明には若干腑に落ちないところがある。この śloka そのものの解釈からして合点の行かないところがあるようだ。bhakti を以て供えられた捧げ物は「クリシュナは必ずそれを受けると言おうとしているのだろうか。ならば、その複文の主節に属すると思われる“prayata-ātmanas”は、どういう意味だろうか。上村氏は「その敬虔な人から」と訳す。上村氏は、「敬虔な人」でどのような人のことを意図しているのだろうか。それが先ず気にかかる。そして上村氏は、その部分は、主節に属するだけでなく、従属節にも同じように係っていると理解しているようだ。すると、上村氏のその BhG IX-26 の解釈を丁寧言葉にすると、次のようなことになるのだろうか。

「敬虔な人が bhakti をこめて私に、葉、花、果実、水を供えるなら、その敬

虔な人から bhakti をもって献げられたものを私は受ける。」

やけに冗漫な表現である。「こめて」は「もって」のこことだと好意的に理解して、あっさり言うとする、「敬虔な人によって、bhakti をもって、私に、献じられた葉、花、果実、水を、私は受ける。」とでもなるだろうか。そうだとすると、BhG IX-26 は、やけにまどろっこしい表現ではないだろうか。この上村訳に限らず、以下の和訳はどれもすっきりしない。一つには、prayata-ātman の解釈にもよると思われるが、単にそれだけではないような気がする。わたしは、この BhG IX-26 に審及してその意味を闡明することによって、bhakti という「愛」の内実を浮き彫りにすることが出来るかもしれないとも考えたのである。

華葉、花卉、果実、闍伽の水をば、信愛もて、われに献ぐる善根の土の、信愛より供えしところ、われは享く。(二六) (鑑 [1998] 113 頁)

26 ひとがもし、葉、華、果実、水を、献身的愛をもつて予に供えるならば、その献身的愛をもつてたむけられたものを、予は心を献げた [その] 人から享ける。(服部 [1967] 304 頁)

人もし誠信をもちて、葉・花・果実・水をわれに供うるとき、心を抑制したる者 (prayatātman) により、誠信をこめて捧げられたるものとして、われこれを享く。(二六) (辻 [1980] 155 頁)

いかが。ここに囚らずも現れる prayata という語について注目して文献学的な考証をおこなっているのは、やはり Gonda 先生である。それは、ヴェーダ文献以降の各種文献中に現れる prayata の意味について貴重な知見を与えるものであるが、残念ながら、この BhG IX-26 の用例には言及していないようだ。また、『バガヴァッド・ギーター』の ātman についての貴重な論考を発表している原實先生も、この BhG IX-26 の ātman の用例については触れていないようである。pra-yam- という動詞は、文字通り、「与える」「捧げる」「供える」という意味に解される。したがって、一行目の prayacchati との関係を考えて prayata-ātman を解釈するならば、「捧げられたアートマンを持つ人」という解釈がやはり魅力的である。服部正明氏の「心を捧げた [その] 人」とは、そう

した理解を訳文に示したものとして貴重である。だが、おそらく、服部先生はこの理解は、例えば、『バガヴァッド・ギーター』研究史では重要な位置を占める Edgerton の以下の英訳・註に依拠したものと言えるかもしれない。

26. A leaf, a flower, a fruit, or water,

Who presents to Me with devotion,

That offering of devotion I

Accept from the devout-souled (giver)*. (Edgerton[1946], p.93)

(*) Or perhaps, ‘from him that has given himself.’ (p.184)

一見、服部氏の和訳は、この Edgerton の解釈をそのまま肯った結果のようにも見えるが、そうだとすると和訳文としては不十分な感は否めない。Edgerton の理解を和訳文に正しく移入するためには、辻直四郎訳「心を抑制したる者 (prayatātman) により、誠信をこめて捧げられたるものとして、われこれを享く。」の「・・・ものとして、」が不可欠となるであろう。わたしは、以下のように訳文をしたててみた。

人が葉、花、果実、水を、わたしに、[献身的な] 愛をもって (bhaktyā)、捧げる (prayacchati) ならば、それを、わたしは、自己を [わたしに] 捧げた者 (prayata-ātman) よりの、[献身的な] 愛 (bhakti) に基づいて捧げられたもの (upahrta) として、嘉納する (aśnāmi)。(拙訳)

いかがだろうか。ここに見られる bhaj-、bhakti は、『ナラ王物語』におけるダマヤンティーのナラ王に対する「愛」とまったく呼応するものである。クリシュナ (= ヴィシュヌ) 信仰における、信者 (A) の、クリシュナ (B) に対する bhakti と「A は B を bhaj する」にまったく共通のものである。A が B に捧げるのは「(信) 愛」などではない、捧げるのは「自己/自身」ātman 以外にはないのである。逆に、葉や花や果実や水が捧げられても、捧げられる側は、少しも嬉しくはないであろう。だが、bhakti を以て捧げられるとしたら、それは、その者が、自己を捧げた者であることの証となる。捧げられた者としては、それを受けるか、拒否するかの二者択一しかない。人間のナラ王と万物の創造者であるクリシュナ (ヴィシュヌ神) の隔たりは果てしもなく大きい。ナラ王は拒

否することが可能だが、万物の根源であるヴィシュヌ神には、それは叶わぬのである。例えば、先に見た上村氏のコメント中の一文「全身全霊で「私」すなわち最高神たるクリシュナを愛し、祈念して、葉や花や果実や水を供えるなら、クリシュナは必ずそれを受けるといなのです。」の通りである。

この上村氏の「全身全霊」は、以下の用例を踏まえた用語と言えるが、併せて引く鎧淳氏の訳文中の訳語でもあった。

(x) yo mām evam asaṃmūḍho jānāti puruṣa-uttamam /
sa sarvavid **bhajati** mām sarva-bhāvena bhārata // (BhG XV-19=Mbh VI-37-19)

迷妄なく、このように私を至高のプルシャと知る人は、一切を知り、全身全霊で私を**信愛**するのである。(一九) (上村 [1992] 120-121 頁)

迷妄なく、かくわれを最高の存在と知るひとは、一切を知り、全身全霊をもてわれに**信愛**を捧ぐ、一バラタの御子よ一。(一九) (鎧 [1998] 164 頁)

同一のサンスクリット語のテキストに対して各和訳が競合することはやむを得ない。既に一つの全和訳があるのだから、それで充分とはいかないのであろう。自分なりの新訳を公にしたい。その結果、訳文の独自性を打ち出すことに性急なあまり、とんでもない訳語を世に解き放ってしまうことがある。上村訳に落ちていた呼格の *bhārata* の訳語を鎧氏はしっかりと補っている。だが、今の場合、問題なのはそんなことではない、最重要な術語とも言うべき *bhaj-* の定動詞 *bhajati* である。「[かれは、] わたしを *bhaj* する」である。上村訳は「信愛する」、鎧訳は「信愛を捧ぐ」である。こうしたケースが『バガヴァッド・ギーター』にはこの例に限らずしばしばあるのである。上村訳は、常に「信愛する」、鎧訳は「信愛を捧ぐ」である。そして両者にとっては、「信愛」は、*bhakti* に用意された訳語である。世の中には、「愛を誰それに捧げる」という言説が溢れているようでもあるし、われわれ日本人には、「信愛を捧ぐ」という表現は耳に馴染みやすいとも言える。だが、これまでの議論でも明らかのように、*bhaj-/bhakti* には、捧げ物は付きものである。だが、*bhakti* は捧げ物ではないことを知れば、その「信愛を捧ぐ」という訳語があまりにも不適切であることが、瞭然である。英文などでも屡々目にする通常の “with love” は、「愛を

もって」であって、「愛をこめて」などではないことを知るべきであろう⁹。

さて、この問題に関連させては、原先生がその周到な「Bhakti 研究」の中で紹介されているアシュヴァゴーシャ Āśvagoṣa の『端正なる難陀』 *Saundarananda* 中の以下の śloka に触れておきたい。

(xi) śocatā pīḍyamānena dīyate śatrave yathā /
 na **bhaktiā** na[^]api tarṣeṇa kevalaṃ prāṇa-guptaye //18//
 yogācāras tathā[^]āhāraṃ śārīrāya **prayacchati** /
 kevalaṃ kṣud-vighāta-arthaṃ na rāgeṇa na **bhaktaye** //19// (Johnston[1928], p.98)

「譬えば憂い悩む者の敵に与うるは、bhakti によるに非ず、又欲求によるに非ず、唯生命を護るためである。

その如く瑜伽行者は食を身体に与える。そは唯空腹を除くため、愛染の故に非ず、又 bhakti のために非ず。」（原 [1962] 9 頁）

ここで原先生は、この用例によって、A と B の二者の間に dā- とか pra-yam- という動詞で表される何かの「授与」があったとしても、色々なケースがある

9 一語を二語で訳している点である。この人は、bhaj- ないし bhakti を理解しているとは到底考えられない。「信愛を捧げる」という表現は、例えば「愛する」という語を「愛を捧げる」と表現することがあることから、可能だろうと言うなかれ、信愛とは、捧げるものではなく、B に対して A が持つ<性質>というべきものであることを忘れまい。A に B に対する信愛が生じた結果、他の何かたる X が B に捧げられるのである。これこそが、信愛という愛の実態である。鑑氏と上村氏は、『ナラ王物語』と『バガヴァッド・ギーター』の和訳で、ほぼ同時期に競合する立場にあったと言える。あまり知られていないかも知れないが、例えば鑑 [2002] といったかなり辛口の翻訳評を鑑氏は公にしている。その数ヶ月後に上村氏が思い半ばにして逝去されたことを思うと、感慨無量である。わたしは、今でも時折上村 [2004] や、上村 [2005] viii 所載の原先生の「解説文」を読むが、在りし日の上村氏のことを思い浮かべて涙を禁じ得ない。これまでも見てきた通り、鑑氏の『ナラ王物語』の和訳は相当に怪しいとの印象を持った。どちらの作品においても bhaj-, bhakti はかなり重要な用語と言える。それを廻る鑑氏の訳語はまったく朦朧としている。それをあちこちに振りまき誤解の根を蔓延らせているように思える。岩波文庫の『ナラ王物語』は、直ちに改訳を断行すべきだろうと思う。

ことを指摘している。それと共に、**bhakti** には、何かの「授与」が付きものであることを具体例を以て、確かと指摘しているのである。また、この問題からめては、以下の用例を二つ引いて確認しておきたい。

(xii) *tasmāt sarveṣu kāleṣu mām anusmara yudhya ca /*

mayi arpita-mano-buddhir mām eva^eeṣyasi asaṁśayam //7//

(BhG VIII-7=Mbh VI-30-7)

それ故、あらゆる時に私を念ぜよ。そして戦え。私に意と知性を委ねれば、疑いなく、まさに私のもとに来るであろう。(七) (上村 [1992] 76 頁)

それ故に、一切時に、わたしを憶念せよ、そして戦え。わたしに、意と知性を捧げた (**arpita-mano-buddhi**) ならば、疑いなく、[あなたは] 他ならぬわたしの下に (*mām eva*) 到るであろう (*eṣyasi*)。(拙訳)

(xiii) *santuṣṭaḥ satataṁ yogī yata-ātmā dṛdha-niścayaḥ /*

mayi arpita-mano-buddhir yo mad-bhaktaḥ sa me priyaḥ //14//

(BhG XII-14 =Mbh VI-34-14)

常に満足し、自己を制御し、決意も堅く、私に意と知性を捧げ、私を信愛するヨーギン、彼は私にとって愛しい。(一四) (上村 [1992] 106 頁)

常に満足し、ヨーギン (*yogin*) であり、自己を制御し／捧げ (*yata-ātman*)、堅牢なる決意を持ち、わたしに (*mayi*) 意と知性を捧げた (**arpita-mano-buddhi**)、わが信愛者 (*mad-bhakta*) たる、その者は、わたしの (*me*) 愛しき者 (*priya*) である。(拙訳)

bhakti を持つ者の前提／必要条件であるかの、*prayata-ātman* (自己を捧げた者) たることを具体的に示すと、前節の「ナラ王物語」のダマヤンティーの場合だと、「わたし、及びわたしに属する他の財物、その一切は、あなたのもの」になる。だが、『バガヴァッド・ギーター』の絶対的なクリシュナを相手にした場合、実質的には、どのようなものとしてイメージされるのか。クリシュナ

に自己を捧げる (prayata-ātman) 場合の ātman の意味がここで問われることになる。「捧げられた」 prayata に重なる過去分詞として、「向けられた／捧げられた」 arpita と共に、manas と buddhi が用いられることが一度ならずあるということである。arpita とは言うまでもなく、「行く」 r- の使役形の過去受動分詞である。自己 (ātman) の中核を為す精神性として、いわゆる「心」があるが、心の作用主体として想定されるのが、思考器官としての意 manas と決定知 niścaya を生み出す統覚機能の担い手たるいわゆる「知性」 buddhi が捧げられる／向けられると表現されるのである。その他に、prayata-ātman(BhG IX-26) に酷似した yata-ātman(BhG V-25)、yata-ātman(BhG XII-14) という語が用いられている。BhG IX-26 の場合は、“suddha-buddhi”(p.146) と註釈した Śaṅkara は、この yata-ātman に関しては、“saṃyata-indriya”(p.96)、“saṃyata-svabhāva”(p.186) と註釈している。ここよりすると、prayata-ātman も yata-ātman も、通常よく見られる訳語「制御された自己を持つ」「自己を制御して」「(感官を)制御して」のように解釈すべきという意見もあろうし、また、「清らかな自己を持つ」という解釈もあるというように、結局混乱だけが残るように見えないこともないが、「自己がある対象からぶれることなくその対象に固着する」ことが、いわばその対象に実質「自己を捧げる」ということと考えられるのではないか。あの「ナラ王物語」の自選式の方が想起される。

(xiv) damayantī tato raṅgaṃ praviveśa śubha-ānanā /

muṣṇantī prabhayā rājñām cakṣūṃsi ca manāṃsi ca //7//

tasyā gātreṣu patitā teṣāṃ drṣṭir mahātmanām /

tatra tatra[^]eva saktā[^]abhūn na cacāla ca paśyātām //8// (Bühler[1888], p.15, ll.1-4)

それから、清らかな顔を持てる (śubha-ānana) ダマヤンティーは、[その] 光輝 (prabhā) によって、王たちの、眼 (cakṣus) と意 (manas) を奪いつつ (muṣṇat)、ステージ (raṅga) に入りました (praviveśa)。見つつある (paśyat)、それら気高き者 (mahā-ātman) たちの視線 (drṣṭi) は、かの[ダマヤンティー]の、肢体 (gātra) に落ちて (patita)、各々のその同じところに (tatra tatra[^]eva) 釘付け (sakta) となり、動くことはありませんでした (na cacāla)。(拙訳)

「[献身的な]愛」 bhakti の場合は、「奪われる」のではなしに、自身の知性

(buddhi) が介在するものであるから、「向ける」のであり、「捧げる」のである。それは邪念を排除した（＝清らかな）、揺れ動くことのない（制御された）ものである。ダマヤンティーやサーヴィトリーなどの夫に対する「愛」の一つの形と言うべき、(vi)に見られた yata-vrata とか、しばしば古典インド世界で話題となる pati-vrata とかとおおむね重なるものとなるであろう。

本攷の主眼はあくまでも「ナラ王物語」のダマヤンティーの愛である。

無事自選式が済み、なんの障害もなくなったナラが、ダマヤンティーに対して率直に漏らした言葉を思い出そう。自身が「あなたの言葉を悦べる (rata) 夫である」と口にしたナラは続けてダマヤンティーに言った。「わたしの生命が身体のうち存続する限り、輝ける微笑みを持てるお方よ、[わたしは] あなたの中にあるであろう。」と。bhaj- や bhakti という言葉でダマヤンティーのナラに対する「愛」は指示されてはいたものの、ナラは自身の「愛」を、それに類する言葉では表現することはなかった。ダマヤンティーのナラに対する「愛」は、自分、及び自分に属する一切はナラに帰属するという事で裏打ちされたものである。これが相手に嘉納されたことによって、ダマヤンティーは自分の居場所をナラの内に確保したということである。そして、ナラは、わたしの生命が身体のうち存続する限り、輝ける微笑みを持てるお方よ、[わたしは] あなたの中にあるであろう。」と表明したのである。では、先に見た例外的な (viii) の “bhajāmi” を除くと、bhaj- を用いて自身の「愛」を表現することのないクリシュナは、通常どのように表現しているであろうか。それが、以下の一節である。

(xv) samo^aham sarva-bhūteṣu na me dveṣyo^asti na priyaḥ /

ye **bhajanti** tu mām bhaktyā mayi te teṣu ca^apy aham // (BhG IX-29=Mbh VI-31-29)

私は万物に対して平等である。私には憎むものも好きなものもない。しかし、信愛をこめて¹⁰私を愛する人々は私のうちにあり、私もまた彼らのうちにある。(二九) (上村 [1992] 84 頁)

10 (ix)に関連して先にも触れたように、「信愛をこめて」は、適当ではない。「信愛をもって」であろう。

われは、一切衆生に平等不違なり。愛憎、われになし。されど、信愛もてわれを愛しむ人びとわれにあり。またわれ、かれにあり。(二九) (鑑 [1998] 114 頁)

わたしは一切の衆生 (sarva-bhūta) に対して平等 (sama) である。わたしには、憎むべき者 (dveṣya) も愛しき者 (priya) もない。しかるにわたしを [献身的に] 愛する (bhajanti) それらの者は、[その] [献身的な] 愛故に (bhaktyā)、わたしの中にある。そしてまたわたしはかれらの中にある。(拙訳)

上村訳も鑑訳も「bhaktiをもってbhajする」と解している。「AがBをbhajする」＝「AはBに対してbhaktiを持つ」という原則に則れば、その解釈は重複である。その結果、貴重な「信愛」表現たるbhaj-という動詞の意味を骨抜きにすることになっている。bhaktyāは、やはり、後ろにかけてしかるべきであろう。そして、bhaj-/bhaktiという愛の成就是、ナラとダマヤンティーの場合の(iii)に見られた「相思相愛」paraspara～prītaか、または、両者その者が、「相互の中に住まう(＝相互居住)→合体/合一化」という形で表現されることになるのである。また、一度、仮にこの「[献身的な]愛」bhaj-/bhaktiが成就したとしても、人間同士の場合には、「永久に」という保証はなされないであろう。永遠と思われた「愛」も、女の側、ないし男の側に「心変わり」が起りえるからだ。では、信者とクリシュナの場合には、どうか。信者がクリシュナと「愛」を成就するとは、いわば一つの「解脱」mokṣaを意味する。一度解脱した者は、永遠である、というのが、インドの場合の鉄則であろう。次の、一節は、「ナラ王物語」でも「バガヴァッド・ギーター」でもないし、また「サーヴィトリー物語」でもないけれど、『マハーバーラタ』の用例であるし、このbhaj-/bhaktiという愛のメカニズムを考える上で極めて重要な用例であろうと思うので、以下に引く。

(xvi) mayy eva mana ādhatsva mayi buddhiṃ niveśaya /

nivasiṣyasi mayy eva ata ūrdhvaṃ na saṃśayaḥ //8// (BhG XII-8=Mbh VI-34-8)

私にのみ意を置け。私に知性を集中せよ。その後、あなたはまさに私の中に住むであろう。疑問の余地はない。(上村 [1992] 105 頁)

わたしにのみ [あなたは] 意 (manas) を置け。わたしに、知性 (buddhi) を
 入らしめよ。今後、[あなたは] 他ならぬわたしに、住するであろう (nivasisyasi)。
 [このことには] 疑いはない。(拙訳)

“On Me alone let your mind dwell, then in truth you will find your home in
 Me”(Gonda[1977], p.110)

(xvii)sarva-bhūta-sthitam yo mām **bhajaty** ekatvam **āsthitaḥ** /
 sarvathā vartamāno^api sa yogī mayi vartate //31// (BhG VI-31=Mbh VI-28-31)

「一体観に立って、万物に存する私を信愛する者、そのヨーギンは、いかな
 る状態であろうとも、私のうちにある。」(上村 [1992] 66 頁)

一切衆生のうちに坐せるわれを、ただこれのみと信じ、愛するヨーガ修行者は、
 いかに生きるも、われにありて生きるなり。(三一) (鑑 [1998] 89 頁)

一切の衆生に存する (sarva-bhūta-stha) わたしを、合一を願って (ekatvam
 āsthitaḥ)、[献身的に] 愛する (bhajati)、そのヨーギンは、いかなる状態にあ
 ろうとも、わたしの中に存する。(拙訳)

“The one who (in this way) participates in Me or devoutly loves Me (both expressions
 translate the verb *bhajati*), (Me) as abiding in all beings, abides in Me” (BhG. 6,31).
 (Gonda[1977], p.110)

わたしは、この (xvii) の用例に見られる ekatvam āsthitaḥ を重視したい。これ
 は何を意味しているのだろうか。また、āsthitaḥ の元になる動詞は ā-sthā- であ
 る。(i) の「ナラ王物語」の中のダマヤンティーの愛を語る上で、絶対的に重要
 な用例の中にも、この動詞が出てきている。「自殺する」を表現するのに用い
 られている重要な動詞である。上村訳の「一体観に立って」とはどのような意味
 だろう。また鑑訳の「ただこれのみと信じ」とはどのような意味か。bhaj- とは、
 絶対者との合一を願っての絶対者に対する信者の有り様を表すものであろう。
 とすれば、bhaj するとは、いわば「解脱」を願っての振る舞いと考えられる。

bhaji することによって、相手の中に住むことが出来る、しかも自分は気づいていないかも知れないが、相手は、自分の中に存する絶対者である。相手の中に自分が住んで、自分の中に相手がいる、とすれば、自分と相手とは同一性（一体性、合一）を実現したことになる。これが bhakti を考える際に、最重要な視点なのではないか、ということである。本節 (ix) にかからめて紹介した上村氏のコメントにも、「このバクティとは、一つに結びつく愛です」と表現されていたのではないか。絶対者との合一を目論んでの儂い人間の足掻きこそ、bhakti という愛だろうというのが、本致で改めて得たわたしの確信である。いかな駄目人間でもその者と一つになりたい、それが人間世界の bhaji- であり、bhakti であり、ダマヤンティーの愛である。

むすびにかえて

短い「ナラ王物語」の美貌のヒロイン、ダマヤンティー、その「愛」という隠れ蓑を借りて、bhakti の周辺を右往左往した凡俗の軌跡に過ぎないわたしの今回の論攷は、以上で終わる。が、わたしがそこから遙か遠方に垣間見た、bhaji-、bhakti の風景とは、おそらくこういうことである。

bhakti に関しては例えば「信愛」ということばがその訳語としてしばしば用いられる。これは宗教上の信者の信仰する対象に対する特別な「愛」を表す端的な用語としてとても重宝するものであるが、その「愛」の内実を説明するものではなかった。わたしとしては、それを、信者が信仰の対象である者に、身も心も含む自身のすべてを捧げる覚悟をもって対した時の「[[献身的な] 愛]」と考える他ないように思われる。この bhakti は、ある意味では、信者が信仰の対象と合一することを目指したものであり、その意味でも、通常、人間世界で見られる男と女の間で問題となる「愛」と何ら変わらぬものと言える。結果として期待されるのは、信者が信仰対象に全面的に帰属することである。だが、そういう愛の成就是、受け手である信仰対象の側が、その信者の愛の享受を前提とする。その場合、仮に受け手がその愛を受け容れることを拒否したらどうであろうか。信仰のことが問題になる場面で、その間の事情がテキスト上に克明に描かれることは実際はほとんどないように見える。本致が主に扱っている「ナラ王物語」のダマヤンティーの場合とはともかくとしても、『バガヴァッド・ギーター』の中ではどうか。信者が信仰対象に対して自身の bhakti を表明した結果、信仰対象からは、「あなたは、愛しき者 priya である」、または「あなた

は、わたしの内に在る」、そして一歩進んで、「わたしも、あなたの内に在る」と表明されるのである。信仰対象の側から気楽に「わたしも、あなたを bhaj する」と言ってもらえると事は簡単なのだが。その代わりに発せられる、「わたしも、あなたの内に在る」はある意味ではまことに興味深い。その言葉の意味をしっかりと噛みしめるべきであろう。ヴィシュヌ信仰は、有り難いことに、人間世界の色恋沙汰とは違って、bhakti が表明され、それが認証されたならば、拒否されることがないことである。bhakti には、時に ananya-（一途）とか、ananya-manas（一心）等といった限定辞が付される場合があることも事実である。したがって、信仰対象の側から信者に課せられる厳めしい条件のようなものが描かれることがある。その条件に適っていない場合には、受け容れられないこともあり得るということであろう。だが、信仰対象の側の本音は、宇宙万物の絶対の根源たるあのブラフマン同様、自分は、「一切の衆生（sarvabhūta）に存する（遍満している）」、「一切の衆生は自身に由来する」という意識である。そうであればこそ、「自身は、わたしのもの、自己の所有物である」との世俗的な意識から解放された「[献身的な]愛」を持つ信者であることが、絶対の信仰対象により認証されるならば、その「愛」は必ず成就するのである。「わたしは、あなたの内に、あなたは、わたしの内に在る」という同一性が成立することになる。これは、ある意味では「解脱」と言い得るであろう。

このまったくの小論で、恥ずかしながらもわたしとしては、やっと bhakti の意味を尋ねる旅の緒に就いたというところである。居並ぶ碩学の累積された手堅い研究の前には、わたし如きにいまさら新しいことなど言えるわけがないのであるが、今後も引き続き、一歩ずつでも理解を深めていけたらと念願する。本攷を閉じるにあたって、Gonda 先生の bhakti の文献学的（意味論的）研究の重要な総括的なコメントを引いておくこととする。

“Now, from an examination of the use of this term and the etymologically related words in the Mahābhārata and other works it appears that among the semantic nuances expressed by the term are also those of « forming part of, having a share in, participating in, communing with, belonging to, being intimately related to or associated with, adhering to, clinging to ». These shades of meaning presuppose a certain reciprocity or at least the idea of participation, or participating in another being with which one can even unite. Thus in the closing scene of the Rāmāyaṇa Rāma, being identified with

Viṣṇu, says « (my) bhaktas must be loved » or « I must commune with them and love them » (bhaktā hi bhajitavyāḥ). ...” (Gonda[1977], pp.109-110)

この最後の部分にある『ラーマーヤナ』のエンディングの詩節とは、以下のものである。原典に基づく『ラーマーヤナ』の個人全訳を成し遂げた中村了昭氏による訳文を付す。

(xviii) ime hi sarve snehān mām anuyātā yaśasvinaḥ /
bhaktā hi bhajitavyāś ca tyakta-ātmānaś ca mat-krte //17// (R VII-100-17¹¹)

「・・・これらすべての者は、愛情からわたくしについて来た者たちです。いずれも令名高い者たちで、わたくしを信愛しており、信愛すべき者たちで、わたくしのために自分を顧みない者たちです。」(17) (中村 [2013] 413 頁)

“These illustrious ones have followed me out of love. **They are worthy of my respect for they are my devotees and have renounced their persons for me.**”(Dutt[1998], p.246)

唯唯、幸いなるかな、bhakta！（了）

【略号・参考文献】

BhG : *Bhagavadgītā*→Mbh

Mbh : *Mahābhārata*(PoonaCriticalEdition)

R : *Rāmāyaṇa*(BombayEdition)

SBhG : *Śāṅkarabhāṣya ad Bhagavadgītā*(Works of Śāṅkarācārya,Vol.II)

Brough, John

[1951]: *Selections from Classical Sanskrit Literature with English Translation and Notes*, London.

Bühler, G.

[1888]: *Third Book of Sanskrit*, 3rd Edition, Bombay.

Buitenen, J. A. B. van

[1975/1981]: *The Mahābhārata:Book2&Book3*, Pheonix Edition, Chicago.

[1981]: *The Bhagavadgītā in the Mahābhārata*, Chicago.

11 Baroda の Critical Edition では、ime hi sarve snehān mām anuyātā manasvinaḥ / bhaktā bhājaitavyāś ca tyakta-ātmānaś ca mat-krte //15// (R VII-100-15) となっている。

Caland, Willem

[1917/1982]: *Sāvitrī und Nala*, Wiesbaden.

Dutt, M.N.

[1998]: *Rāmāyaṇa of Vālmīki with English Translation by M.N.Dutt...*, Vol.IV, Delhi.

[2001]: *Mahābhārata, Vol.II Vana Parva*, Delhi.

Edgerton, F.

[1946]: *The Bhagavad Gītā*, Cambridge.

Gonda Jan

[1963]: “Prayata”, *BhV* 20-21(1960-1961) (*Munshi Indological Felicitation Volume*).

[1977]: “Vedic Cosmogony and Viṣṇuite Bhakti”, *Indologica Taurinensia*, 5.

Hara Minoru

[1964]: “Note on Two Sanskrit Religious Terms: *Bhakti* and *Śraddhā*”, *IJ*, Vol.VII.

[1992]: “*Śraddhā* in the Sense of Desire”, *Asiatische Studien/ Études Asiatiques*, XLVI.1.

[2002]: “The Hindu Concept of Friendship: A Note on Sanskrit *praṇaya*”, *Rivista degli Studi Orientali*, Vo.LXXV.

[2009]: “Words for Love in Sanskrit”, *Rivista degli Studi Orientali*, Vo.LXXX.

Johnston, E.H.

[1928]: *The Saundarananda of Aśvaghōṣa*, London.

Malaviya, Debi Prasad

[1958]: *Nalopakhyaṇa with English Translation*, Allahabad.

Radhakrishnan, S.

[1998R]: *The Bhagavadgītā with an Introductory Essay, Sanskrit Text, English Translation and Notes*, New Delhi.

Sargeant, Winthrop

[1994]: *The Bhagavad Gītā (Revised Edition)*, New York.

Swami Swarupananda

[2000R]: *Srimad Bhagavad-Gita with Text, Word-for-Word Translation, English Rendering...*, Calcutta.

Wezler, Albrecht

[1965]: *Nala und Damayantī, Eine Episode aus dem Mahābhārata*, Stuttgart.

上村勝彦

[1992]: 訳『バガヴァッド・ギター』岩波文庫

[1998]: 著『バガヴァッド・ギターの世界～ヒンドゥー教の救済』NHK 出版

[2002-5]: 訳『原典訳マハーバーラタ』1～8 ちくま学芸文庫

[2004]: 著『始まりはインドから』筑摩書房

金沢篤

[1985]: 訳「中道としてのヒンドゥー・バクティ」(ジョン・B・カーマン)『神の知られざる顔』教文館

北川秀則・菱田邦男

[1999] : 訳『ナラ王物語とサーヴィトリー姫物語』山喜房佛書林
スワミ・ヴィヴェーカーナンダ

[1974] : 著『愛の叡智 (ヴィヴェーカーナンダ講演集)』日本ヴェーダーンタ協会

[1991] : 著『バクティ・ヨーガ』日本ヴェーダーンタ協会

辻直四郎

[1980] : 訳『バガヴァッド・ギター』講談社

中村了昭

[2013] : 訳『新訳ラーマーヤナ 7』平凡社

服部正明

[1967] : 訳『バガヴァッド・ギター』『ヴェーダ・アヴェスター』筑摩書房

原実

[1962] : 「Bhakti 研究」『日本佛教学會年報』第 28 号

[1963] : 「バガヴァッド・ギターにおけるアートマンの概念」『自我と無我』平楽寺書店

[1975] : 「古典インドの愛」『仏教思想 1 愛』平楽寺書店

[1984] : 「古典インドの愛」『東京大学公開講座 愛と人生』東京大学出版会

松濤誠廉

[1957] : 訳「馬鳴著 端正なる難陀」『大正大学研究紀要 文学部・仏教学部』第 42 号
鎧淳

[1989] : 訳『マハーバーラタ ナラ王物語』岩波文庫

[1998] : 訳『完訳 バガヴァッド・ギター』中公文庫

[2002] : 「上村勝彦訳『原典訳マハーバーラタ 3』『ナラ王物語』について」『中外日報』9
月 7 日号

[2003] : 著『ナラ王物語—サンスクリット・テキスト、註解、語彙集、韻律考ほか—』
春秋社

〈キーワード〉『ナラ王物語』、ダマヤンティー、古典インドの愛、バクティ、『バガ
ヴァッド・ギター』、ヴィシユヌ神、クリシュナ信仰